

# 中世後期日野山名氏の基礎的考察

伊藤 大貴

はじめに

本稿で取り上げる山名氏は、室町幕府を構成した有力守護家の中で細川氏に比肩する規模の一族であり、但馬国を本拠地とする惣領家を中心に一族被官が結集する「同族連合体制」が存在したことが知られている。山名氏の「同族連合体制」に関しては、川岡勉・市川裕士・岡村吉彦各氏によって検討が加えられており<sup>①</sup>、とりわけ室町期山名氏の政治動向を下支えした重要な基盤として認識されつつあるが、こうした先行研究に課題がないわけではない。先学の検討対象は主に守護職を有した一族であり、惣領家のほか、伯耆・石見・因幡各庶守護家の考察が中心であった。一方で山名一族には守護職を有していない庶流家が数多く確認できるように、山名氏の一族関係を捉える際には、非守護の庶流家も含めた幅広い視野を持つ必要がある。しかし、実のところ、非守護の庶流家に関しては史料が限られているためか、基礎研究が乏しく、基本的な情報すら共有・把握されていない。このような研究状況を改善するためにも、まずは個別具体的な事例を明らかにする作業を地道に積み重ねていかなければならないと考える。

よって、本稿では非守護の山名庶流家のうち、伯耆国日野郡を拠点とした日野山名氏<sup>②</sup>を素材に取り上げる。後述するように、日野山名氏は山名氏の系譜上、特筆すべき位置にある庶流であり、基礎的な情報を把握しておく必要があると考えたためである。また、近年では武家領主の在京活動や都鄙関係に注目する

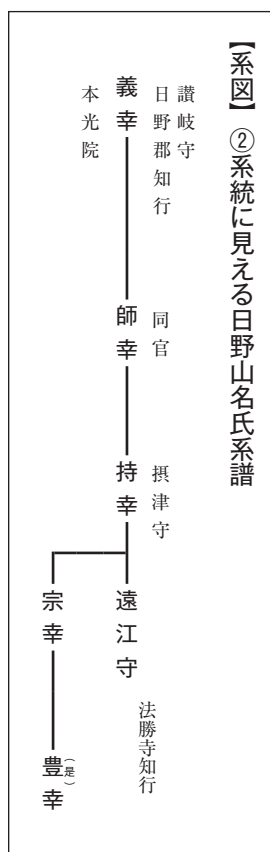
研究が盛んであるが<sup>③</sup>、山名庶流家の実態は十分明らかではない。日野山名氏をもとに具体例を明らかにすることも意義があろう。さらに本拠地の日野郡は、戦国期に入ると戦国大名同士の狭間に位置する境目地域として政治的・軍事的にも重要な地域と化していく。日野山名氏の事例は中国山地の境目領主の動向を明らかにすることにもつながるだろう。以上を踏まえつつ、本稿では日野山名氏の系譜情報、在京活動、戦国期の動向を中心に検討することで山名庶流家の展開例を具体的に明らかにしたい。

## 一、日野山名氏の系譜と成立事情

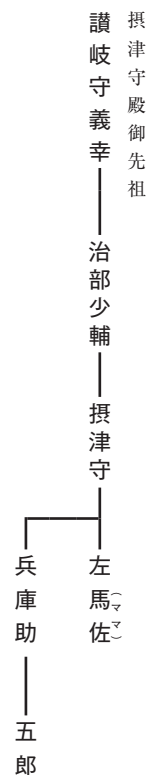
### (一) 日野山名氏の系譜

まず、日野山名氏の系譜関係を整理しておく。日野山名氏の始祖は惣領山名師義の長男義幸という人物である。一般的に流布している『続群書類従 第五輯上 系図部』所収「山名系図」(①系統)では師義の子供として義幸の名は

【系図】②系統に見える日野山名氏系譜



【系図】③系統に見える日野山名氏系譜



見えるが、義幸の子孫に関する情報を欠く。広く流布した①系統の系図に情報が乏しい点は日野山名氏の存在が注目されにくい理由のひとつであろう。一方、寛永一八（一六四一）年の奥書を持つ池田本「山名系図」など（②系統）<sup>(4)</sup>には義幸以降の系譜が記載されている。このほか、江戸幕府が『寛永諸家系図伝』を編纂する時に収集された古系図の中にも日野山名氏の系譜を伝える史料が存在している（③系統）<sup>(5)</sup>。全く情報のない①は成立自体が新しく、何らかの理由で系譜情報が脱落していると思われる。古態本である②・③系統の系図はお互い異同が大きいが、義幸の孫にあたる人物（②系統では「持幸」、③系統では「摂津守」と記載）から子息二人が分岐する記載など基本的な流れは共通している。また、②系統によれば、日野山名氏は「幸」を通字としていたようだが、この点は一次史料からも裏付け可能である。ただし、現時点ではこれ以上絞り込む手がかりに乏しい。

①～③系統に共通するのは、日野山名氏の始祖義幸が惣領家の直系であった点である。南北朝期に山名氏が西国で勢力拡大する土台を作った惣領山名時氏は義幸の祖父に当たる。さらに伯耆守護山名氏の歴代当主に関する系譜史料「伯州山名代々次第」<sup>(6)</sup>では、初代時氏から師義、義幸と継承されたことが記されている。「伯州山名代々次第」は戦国期に禅僧惟高妙安の周辺で作成された系図だが、惟高妙安は山名氏と関係が深く、この系譜認識は山名氏由来の情報と見てよいだろう。このように、義幸は伯耆守護山名氏三代目当主として理解されていた形跡がある。しかし、義幸以後の伯耆守護山名氏当主は義幸弟の氏之系

統に移ったほか、惣領職は叔父時義の系統に移り、それぞれ戦国期まで固定化した。本来惣領直系ともいえるべき義幸であるが、なぜ彼は惣領や守護の地位を継承できなかったのだろうか。それは義幸自身が置かれた状況が影響しており、日野山名氏の成立背景につながるものであった。次にその事情を具体的に検討していきたい。

（二）日野山名氏の成立背景

応安四（一三七二）年二月、山名時氏が死没すると、惣領の地位は嫡男の師義に引き継がれた。しかし、その師義も永和二（一三七六）年三月に死没してしまい、山名氏は惣領の相次ぐ死に直面することになる。師義弟の時義が新たな惣領に就任したが、桜井英治氏によれば、師義の子供は若年のため、時義が中継ぎとして惣領を継承したという<sup>(8)</sup>。桜井氏の指摘は大変示唆的であるが、そもそも義幸は何年生まれなのだろうか。まずはこの点を確認しておきたい。これまでの山名氏研究では取り上げられていないが、義幸の年齢に関する史料が存在する。長文のため、部分抜粋の上で次に掲げる。

【史料1】

抑此祈禱事、去月廿四日、宋縁僧正来告示了、山名民部少輔所勞以外也、<sup>(1)</sup>  
医療頗無<sup>(2)</sup>術云々、於<sup>(3)</sup>今者冥助之外無<sup>(4)</sup>憑方<sup>(5)</sup>、仍乍<sup>(6)</sup>恐便宜貴所等<sup>(7)</sup>モ祈  
禱事可<sup>(8)</sup>申入<sup>(9)</sup>歟之由、且申<sup>(10)</sup>談管領<sup>(11)</sup>了、大法等定不<sup>(12)</sup>聊爾<sup>(13)</sup>事候歟、無<sup>(14)</sup>  
左右<sup>(15)</sup>不<sup>(16)</sup>可<sup>(17)</sup>叶、供護摩等相応本尊相計修之条、可<sup>(18)</sup>為<sup>(19)</sup>何様<sup>(20)</sup>候哉、過分  
之至、狼藉雖<sup>(21)</sup>不<sup>(22)</sup>能<sup>(23)</sup>左右<sup>(24)</sup>、如<sup>(25)</sup>此事又憑申上、被<sup>(26)</sup>垂<sup>(27)</sup>御賢察<sup>(28)</sup>之条、定  
可<sup>(29)</sup>畏申<sup>(30)</sup>歟云々、又因<sup>(31)</sup>之此所勞号<sup>(32)</sup>伝子病<sup>(33)</sup>、虚勞之類、一族ウツリ病云々、  
即故入道病氣更不<sup>(34)</sup>相替<sup>(35)</sup>、仍医療無<sup>(36)</sup>其驗<sup>(37)</sup>、偏可<sup>(38)</sup>專<sup>(39)</sup>祈禱<sup>(40)</sup>之由、本人  
モ家人モ皆存<sup>(41)</sup>念<sup>(42)</sup>之、旁不<sup>(43)</sup>可<sup>(44)</sup>見放<sup>(45)</sup>子細有<sup>(46)</sup>之之間、如<sup>(47)</sup>此言上事子細云々、  
予答云、此勞粗所<sup>(48)</sup>承及<sup>(49)</sup>也、誠以難治至極歟、祈禱事、故禪門之時、歳  
末卷数以下遣<sup>(50)</sup>之了、然上者於<sup>(51)</sup>祈禱<sup>(52)</sup>者強不<sup>(53)</sup>可<sup>(54)</sup>依<sup>(55)</sup>上下<sup>(56)</sup>、又今更非<sup>(57)</sup>可

申「恐懼」之由歟、但力量難<sub>レ</sub>及者無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、領納勤修頗非<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>斟酌<sub>一</sub>之由、大概問「答之」、(中略)翌日遣<sub>レ</sub>状云、彼祈禱事、先日委細示給、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>等閑<sub>一</sub>之条勿論也、但其身已大名也、緯非<sub>二</sub>聊爾<sub>一</sub>、護摩等如<sub>レ</sub>形修<sub>二</sub>之、所勞体太無<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、難<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其驗<sub>一</sub>歟、何様猶加<sub>二</sub>思案<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>申由返<sub>二</sub>答之<sub>一</sub>、而又隆縁僧正来申云、彼祈事、已不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>其恐<sub>一</sub>、申出之上者、枉而被<sub>レ</sub>加<sub>二</sub>御懇祈<sub>一</sub>条所<sub>レ</sub>仰也、此民部少輔事、故山名入道獲麟之刻、種々有<sub>二</sub>申置<sub>一</sub>旨之間、宋縁僧正一事以上加<sub>二</sub>扶持<sub>一</sub>体也、当年廿一才、未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>壯年<sub>一</sub>、事々未練忽受<sub>二</sub>大病<sub>一</sub>、不便之間別而<sub>一</sub>大事由存<sub>レ</sub>之、枉而無<sub>二</sub>隔心<sub>一</sub>可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>云々、猶返答同篇之处、翌朝重又有<sub>二</sub>音信<sub>一</sub>、猶可<sub>レ</sub>然者可<sub>レ</sub>仰<sub>二</sub>懇祈<sub>一</sub>云々、仍サノミ非<sub>二</sub>遁逃之志<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今夕<sub>一</sub>先可<sub>レ</sub>始<sub>二</sub>修尊勝供<sub>一</sub>之由返<sub>二</sub>答之<sub>一</sub>了(後略)。

【史料1】は永和三(一三七七)年二月、青蓮院の尊道入道親王が山名民部少輔のために病氣平癒の祈禱を行った際の記録である。民部少輔は当時義幸が名乗っていた官途であるから、義幸に比定できる。注目すべきは傍線部③に義幸が「当年廿一才」とある。これにより、義幸が延文二(一三五七)年生まれと判明する。桜井氏の指摘のとおり、師義の子供たちは若年であった。さらに傍線部①③に見えるように、義幸が重病を患っていた様子も判明する。また、「故入道」「故山名入道」「故禪門」とあるのは、前年に死去した師義を指しており、臨終に際して師義が義幸に関して色々と申し置いた(遺言)点も興味深い。師義の遺言内容は明らかではないが、遺言を受けた宋縁僧正がことごとく義幸を援助してきたという。師義が義幸の将来を案じていたように見えるが、それは将来惣領を引き継ぐべき存在であったことを反映しているのではなからうか。ただ、師義没後まもなく義幸は治療する術のないという大病を患っていた。彼は経験の乏しい若年であった点に加えて、惣領職を継承できるような器量を欠く心身状態であった可能性が高い。加えて傍線部②によれば、「一族ウツリ病」とある。前年には師義夫妻が相次いで死没し、【史料1】直後の五月には義幸

の妻も亡くなっている<sup>①</sup>。当時、山名氏の惣領一族周辺で何らかの病気が蔓延していたのは確かであろう。このような義幸とその周辺状況を受けて、師義の娘婿にあたる時義が代わりに惣領職を引き継ぐことになったと考えられる。

しかし、加持祈禱の験があったのか、義幸の体調はまもなく回復したと見える。【史料1】の後にも引き続き室町幕府侍所頭人や丹後・出雲守護として活動していた形跡がある<sup>②</sup>。ところが軍記物語の『明德記』によれば、後に義幸が病氣になったため、弟の満幸が「代官」になったという<sup>③</sup>。実際に義幸の分国守護職は至徳年間に入ると満幸が継承しており、満幸が義幸の活動を代行したという『明德記』の伝える内容と合致している。さらに永和三年と同じ病気なのか不明だが、義幸が病に倒れたとされる点も注意しておきたい。至徳四年以降は義幸の動向を追うことはできず、代わりに弟の満幸の活動が増えていく。『明德記』が伝える義幸の病氣も史実なのであろう。永和三年の大病より回復したものの、少なくとも彼は三一歳を境に表舞台から姿を消す。長く活動を継続できたとは言い難い。時義の惣領職継承、満幸の職務代行などを見る限り、病弱な義幸を他の一族で支える分担が存在したといえる。桜井氏は義幸が病弱で継嗣に耐えられないと判断されたと指摘しているが、そのとおりであろう。師義亡き後、病弱な義幸をめぐって山名氏は事実上「集団指導体制」のような形態に移行し、その過程で惣領職の承継から義幸が外されるに至った。なお、②系統の系図には義幸が伯耆国日野郡を知行したと注記されているが、一説に病氣による引退を契機として、日野郡に居住したともいう<sup>④</sup>。

義幸の活動を代行・継承した満幸は惣領の地位を欲したとされる<sup>⑤</sup>。これは義幸が本来惣領を継ぐべき人物であった点に起因すると見てよい。しかし、満幸は明德二(一三九二)年に明德の乱を引き起こして、室町幕府に敗北してしまふ。乱後の論功行賞により、満幸が引き継いだ旧義幸分国はすべて没収されてしまふ。義幸子孫が守護の座に復帰することはなくなった。惣領の地位も時義子孫の系統に固定化されたように、乱を境に山名氏をめぐる状況は大きく変化



するが、義幸子孫もその影響を受けた一族であった。こうして義幸子孫は惣領嫡流より脱落し、守護職を保有しない傍流の庶流家と化したのである。

以上、日野山名氏成立に至る背景を確認した。初代義幸は元來惣領直系の血筋であったが、義幸自身は病弱かつ若年であり、父師義没後に惣領職を継承可能な状態ではなかった。さらに一四世紀末の明德の乱を境として、旧義幸分国はことごとく没収された上、惣領の地位も別系統に固定化した。以後、日野山名氏は守護職を持たない庶流家として展開していくことになったのである。

## 二、日野山名氏と室町幕府・山名惣領家

### (一) 室町幕府の家格秩序と日野山名氏

室町時代の政治秩序は、京都の足利将軍（室町殿）の下に各地の守護や国人ら武家領主が集結する構造であり、彼らの多くは在京しながら幕府に奉仕していた。<sup>(16)</sup>近年では武家領主層の都鄙往来や在京活動、京都と地方を結ぶネットワークなどが注目されているが、日野山名氏の場合はどうであろうか。

室町幕府の家格編成は一五世紀に入ると、徐々に固まっていくが、山田徹氏は「大名・近習・外様」の三分類を提示している。<sup>(17)</sup>その中からさらに相伴衆、奉公衆、外様衆などの細かな家格・集団に分化していくようだが、木下聡氏の整理によると、日野山名氏は外様衆に分類されたという。<sup>(18)</sup>木下氏によれば、外様衆は国持守護などに加えて守護や奉公衆といった枠組みにおさまらない身分・勢力の者たちを含んでおり、守護一族、南北朝期に守護経験のある家、有力国人や大神社の神主などが編成されたという。日野山名氏の場合は南北朝期に守護経験がある上、有力守護家の庶流であるから、その流れを受けて外様衆に編成されたと見てよい。

山名一族ではいくつかの庶流家が外様衆に編成されており、伯耆国に拠点を持つ一族の場合、山名大坂氏、山名河口氏、伊豆守流山名氏も外様衆であった。日野山名氏を加えて四家が外様衆であったが、いずれも国内の経済・交通上の



【地図】伯耆国内の外様衆領主と関連地名  
(出典：国土地理院ウェブサイト「地理院地図Vector」)  
出典地図をもとに筆者が一部加筆している。

要地を押さえた山名一族であり、国人層では外様衆が一切確認できないことから限定的な存在といえる。

また、前出の②系統の系図には、義幸の孫として持幸なる人物が記載されている。後に見るように、持幸の活動時期は惣領山名持豊とほぼ重複しており、外様衆という立場を踏まえると、彼の名乗りは將軍足利義持の偏諱「持」を受けている可能性が考えられる。外様衆の家格と同様に、他の伯耆国人層では確認できない名乗りであり、日野山名氏が將軍権力と結びつきを得ていた形跡が

ある。

このように、室町幕府の家格秩序上、日野山名氏は守護一門として、国持守護に準じる家格の外様衆に編成されていた。さらに將軍の偏諱を受けることが可能な家格であり、伯耆国内でも守護一門に限られた数少ない外様衆領主であった。これらの点は周囲の一般的な伯耆国人との大きな違いであり、傍流の庶流家と化したとはいえ、日野山名氏が没落したことを意味したわけではない。むしろある種の「貴種性」を帯びた一族であったことは留意すべきであろう。

## (二) 日野山名氏の在京活動と一族関係

一五世紀半ばまでの日野山名氏関係史料は断片的であるが、いずれも京都とのつながりを示している。次に一例を掲げて検討したい。

### 【史料2】

五日、丁巳、撰州太守幸公、与<sup>(松智高春)</sup>春公<sup>(大徳)</sup>相率而来、予以<sup>(大徳)</sup>礼待<sup>(大徳)</sup>之、余有二石<sup>(一)</sup>、高峻而成<sup>(二)</sup>雙尖<sup>(三)</sup>、幸公曰、金吾宗全之孫某、呼為<sup>(四)</sup>三郎<sup>(五)</sup>者、好<sup>(六)</sup>鶴<sup>(七)</sup>、<sup>(八)</sup>籠<sup>(九)</sup>之、此鳥以<sup>(十)</sup>石為<sup>(十一)</sup>居也、然無<sup>(十二)</sup>宜者、此石可<sup>(十三)</sup>以<sup>(十四)</sup>當<sup>(十五)</sup>之云、因有<sup>(十六)</sup>欲<sup>(十七)</sup>之々色<sup>(十八)</sup>、乃納<sup>(十九)</sup>之、云幸公悅<sup>(二十)</sup>之、

【史料2】は東福寺僧太極の日記であるが、長祿三（一四五九）年四月、「撰州太守幸公」なる人物が太極の草庵を訪れたとある。太極の日記では諱の一部＋公という人名表記がなされることが多い。つまり、「撰州太守幸公」とは撰津守の官途を名乗り、諱に「幸」を含む人物ということになるが、惣領山名持豊孫の次郎<sup>(政忠)</sup>に関する話題を太極に述べている点からして、山名一族の可能性が想定できる。そうなれば、当主が撰津守を名乗る場合が多く、幸の通字を用いていた日野山名氏が該当する。②系統の系図には撰津守持幸という人物が記載されているが、山本隆志・木下聡両氏は【史料2】の人物を持幸に比定し、特に山本氏は惣領との近い関係指摘している。<sup>(20)</sup> 時期的にも齟齬なく、首肯すべき見解である。さらに【史料2】には持幸が幕府外様衆の鞍智高春と共に

訪れたとあり、持幸が同輩の外様衆と交友関係を有していたことがわかる。清水克行氏によれば、<sup>(21)</sup> 鞍智高春は在京領主の一員であり、太極もまた京都東福寺の禪僧であった。持幸が京都で活動する武家領主や僧侶との人的ネットワークを有していた様子がうかがえるが、後掲【史料4】によれば、当該期の日野山名氏は洛中屋地を知行していた形跡がある。これらは日野山名氏が在京領主の一員であったことを示すものであろう。

加えて注目したいのは、持幸が太極に対して政豊が鶴鶴を飼っていると述べた点である。また、持幸は太極が所持していた石を鶴鶴の住処に使用したいと所望しており、石を次郎に進上するつもりであった。それなりに惣領家に入入りしなければ、惣領一族の個人的な趣味嗜好に関する情報は入手し得ないだろう。惣領家との結合はそれだけではない。例えば、『文正記』によれば、山名持豊と連携した斯波義廉の母親は「山名都督伯父同名撰津守息女」という。<sup>(22)</sup> 「同名撰津守」とあることから、日野山名氏であろう。山本氏は【史料2】に登場する持幸と見ている。ただ、『文正記』に持豊の「伯父」とある点は気にかかる。足利義持から偏諱を受けたという持幸・持豊の共通点から両者は世代的に同年代と思しく、持豊父母の兄弟となると、やや世代が離れる持幸父（師幸カ）、あるいは『文正記』の誤記の可能性も否定できない。<sup>(23)</sup> いずれにしても惣領家と日野山名氏を結ぶ血縁関係の存在は注目できる。

こうした斯波義廉と山名持豊の連携は応仁・文明の乱時の西軍陣営形成につながる動きであるが、両者を結ぶ婚姻関係に日野山名氏が関係していた。同じく畠山義就と持豊の連携に際しても、山名庶流金沢源意の娘が義就に嫁いでいた。<sup>(24)</sup> いずれも庶流家が惣領家の婚姻政策に関係する事例といえる。両者ともに惣領家と密接な関係を有しており、惣領家を中心とする「同族連合体制」の下に非守護の庶流家も包摂されていたことをよく表している。このほか、後掲【史料3】で触れるが、応仁・文明の乱中も持幸は惣領持豊居所の至近に滞在していた形跡があり、とくに持豊・持幸間の太い結びつきが見て取れる。このよう



に、当該期の日野山名氏は惣領家と密接な結合関係を有していたのである。

以上、限られた史料ではあるが、一五世紀半ばまでの日野山名氏の政治的位置や在京活動の様子を見てきた。日野山名氏は將軍から偏諱を受ける存在かつ惣領家と近い関係にある山名庶流であり、在京外様衆の一人として活動していた。伯耆国人も同じく都鄙をまたぐ活動が確認できるものの、日野山名氏のように高い家格を得たわけではなく、国人層と異なる「貴種性」を帯びた点は日野山名氏のような山名一門の特質といえる。この点は、戦国期に日野山名氏が日野郡内の諸領主を束ねる地位にあり、「日野屋形」と呼称されていた背景でもある<sup>(26)</sup>。

### 三、戦国期日野山名氏の動向

#### (一) 応仁・文明の乱以後の日野山名氏

応仁元（一四六七）年五月、応仁・文明の乱が本格的に始まると、戦国期に向けて情勢が変化していく。開戦当時、西軍陣営の大將格であった惣領山名持豊の下には一族被官の大半が属したが、その中に日野山名氏も見える。例えば、『応仁別記』には西軍方の山名一族として「摂津守入道永椿」・「五郎宗幸」とある<sup>(26)</sup>。木下聡氏によると、永椿は持幸が出家した姿という<sup>(27)</sup>。もう一人の五郎宗幸は②系統の系図に持幸子息として見えるから、永椿＝持幸は首肯できる。

次いで文明元（応仁三、一四六九）年三月には次のような逸話が伝わっている。

#### 【史料3】

同三月十六日夜、勝元ヨリ芝薬師へ切テ入テ焼立ケリ。既山名殿廐之前マテ切入ケルヲ、金吾ハ赤糸ノ朱実之具足ニテ、老体ナカラ其身輕ニ庭前ニ躍出テ、「人ハナキカ。者共、切出セ」ト申サレケレハ、摂津守入道父子三人渡合、散々ニ切テマハリケレハ、勝元被官安富紀四郎・甲須亀ヲ始トシテ、究竟兵十余人手ノ下ニ切臥ケレハ、引入シケル部木ニ与布土両人モ、夜打ニ込入ケル者共ト共ニヤウ／＼引テソ遁ケル<sup>(28)</sup>。

【史料3】は京都の西軍陣営にある持豊居所至近まで東軍勢が乱入した際の『応仁別記』の記事である。この時、持豊は庭に出て加勢の者を呼び寄せたとあり、すぐに現れて奮戦したのが摂津守入道ら父子であった。摂津守入道は先ほど触れた永椿（持幸）であろう。持幸父子（宗幸も含むカ）が持豊の居所近くに控えていたことがわかるように、惣領家・日野山名氏の関係の近さを垣間見ることができる。応仁・文明の乱勃発後もしばらく強固な両者の結合が続いたと見えるが、その後、転機となる動きが見られた。日野山名氏の本拠が置かれた伯耆国内の情勢変化である。

文明三（一四七二）年を境に伯耆情勢が変化していく。例えば、同年九月に西軍方の伯耆守護山名豊之が謀反で死亡しており、これを契機に伯耆守護家による出雲侵攻が停止する<sup>(29)</sup>。さらに同年末までに伯耆以外も含めた山名一族被官の東軍転向が相次ぎ、翌文明四（一四七二）年に入ると持豊は東軍との和睦交渉を模索するに至った<sup>(30)</sup>。こうした変化と日野山名氏の関係はどうであろうか。

文明三年二月頃、備中国新見荘の荘官金子氏の書状によれば、「はうきへハ津守下向候、ひんこへハ宮殿下向候」という<sup>(31)</sup>。金子氏の書状では新見荘と隣接する日野郡の情勢に加えて、同じく近隣の備後国を拠点とする国人宮氏の下向も伝えられている。伯耆に下った「津守」が摂津守の略称とすれば、摂津守を名乗っていた日野山名氏の伯耆下向を伝えているのではないだろうか。この書状は文明三年と比定されており、伯耆情勢の転換とさほど時期も離れていない。実際、金子氏の書状によれば、隣接する新見荘では国内争乱の影響に加えて、隣国（伯耆・備後）からの干渉も存在したという。それは逆に日野郡も同様であろう。複数の国に接する境目の日野郡は、早くから情勢変化の影響を受けやすく、近隣の東軍勢力との抗争が激化する中で日野山名氏の下向に至ったと見て差し支えない。

その後、日野山名氏が恒常的に在京していた形跡は乏しい。後述するように、戦国期に入っても惣領家との関係が途絶したわけではなく、洛中屋地の知行相

論も確認できるが、惣領家と共に在京していた状態からの変化は留意しておきたい。在京領主の一員であった日野山名氏にとって一つの転機といえるだろう。

## (二) 一六世紀前半の日野山名氏

しばらく日野山名氏の活動を追うことがなくなるが、一六世紀以後、日野郡は大きな変化を迎える。少なくとも永正年間に入ると、隣国出雲の尼子氏が勢力を拡大し、日野郡内に進出した。<sup>(32)</sup> こうした動きに際して、日野山名氏に関しては国外退去説・残留説の両方存在している。<sup>(33)</sup> まずはこの点を検証したい。

日野山名氏の動向が史料に再び現れるのは次の天文年間である。

### 【史料4】

旧地洛中六角油小路西面二半町事、祖父以来于<sup>レ</sup>今当知行無<sup>二</sup>相違<sup>一</sup>之处、号<sup>二</sup>「買得」<sup>一</sup>、吉田与次及<sup>二</sup>「違乱」<sup>一</sup>条、為<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遂<sup>二</sup>「糺明」<sup>一</sup>、雖<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成<sup>二</sup>「問状」<sup>一</sup>、令<sup>二</sup>「無音」<sup>一</sup>之上者、無<sup>二</sup>其謂<sup>一</sup>者也、所詮、任<sup>二</sup>「当知行之旨」<sup>一</sup>、<sup>(弥カ)</sup>可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>全<sup>二</sup>領<sup>一</sup>知<sup>二</sup>之由<sup>一</sup>、所<sup>レ</sup>被<sup>二</sup>「仰下」<sup>一</sup>也、仍執達如<sup>レ</sup>件、

天文六年三月廿八日

若狭守 (花押)

前丹後守 (花押)

山名撰津守殿<sup>(34)</sup>

【史料4】は天文六(一五三七)年三月に発給された室町幕府奉行人連署奉書である。山名撰津守は②系統系図の豊幸<sup>(是幸カ)</sup>に該当する可能性がある。日野山名氏が洛中屋地を知行していた事実が判明するが、「祖父以来」の知行と見える。宛所が豊幸<sup>(是幸カ)</sup>の場合は持幸が祖父であり、持幸期の日野山名氏は在京活動の形跡があるため十分に理解できる。吉田与次による買得・違乱行為はその時点で日野山名氏の知行が動揺していた証左であろうから、応仁・文明の乱後の在国に伴う知行の不安定化が想定される。とくに注目したいのは、この時に至って不安定な知行を回復させようとした動きである。日野山名氏が京都に対する結びつきを再び強めていた様子がうかがえる。

さらに天文一一(一五四二)年四月には山名撰津守子息「こほ二郎」が幕府奉公衆三上経実の養子として名跡を継承している。<sup>(35)</sup> 高橋正弘氏は三上氏の養子相統一件にかかる幕府奉行人意見状をもとに、元々撰津守子息は三上経実所縁の人物であったため、養子に迎え入れられたと指摘している。<sup>(36)</sup> 三上経実は在国している期間があるため、定かではない面もあるが、元は在京奉公衆の一員であった。<sup>(37)</sup> 日野山名氏が京都方面に復帰する動きを見せていた時期でもあり、三上氏との血縁関係や人的ネットワークの土台は京都社会で形成されたのではないのだろうか。

加えて後に登場する「山名撰津守藤幸」は將軍足利義藤の偏諱を得ていたと考えられる。義藤は天文一五年七月〜同二三年二月までの名乗りであり、その間に偏諱を得たと見てよい。一六世紀に入ると、在国している山名惣領家を含めて山名一族が將軍家から偏諱を受けることはほとんど確認できない。そうした中で異例ともいえる動きであるが、日野山名氏が足利義晴・義藤(輝)政権につながる回路を有していたことを示すものである。在京しなくとも偏諱授与は可能であるが、京都社会との確かなパイプが存在しなければ実現は難しい。こうした動きが天文年間に集中している点は特筆すべきであろう。推測の域を出ないが、洛中屋地の回復という動きも含めると、当該期に日野山名氏の在京活動が復活した可能性は高いといえよう。

このような活動はいつ頃まで確認できるのだろうか。わずかに日野山名氏の動きを示す史料が存在する。次に掲げて検討しよう。

### 【史料5】

社頭之事、如<sup>二</sup>「前々」<sup>一</sup>自<sup>二</sup>「柴之木」<sup>一</sup>下之儀者、何茂頭領之事、相違有間敷候由、從<sup>二</sup>「五郎殿」<sup>一</sup>御意候、就<sup>レ</sup>夫壹筆為<sup>二</sup>「後日」<sup>一</sup>如<sup>レ</sup>件、

<sup>(前書)</sup>「芸州吉田城主毛利大膳大夫元就公臣小河内石見守 幸綱」

天文十六年<sup>(丁未)</sup>癸卯八月<sup>(六カ)</sup>□日 幸綱(花押)

神主

【史料5】は日野郡上榎村の神主雅楽氏に対して、幸綱なる人物が社頭を安堵した文書である。異筆部分では幸綱を毛利元就家臣とするが、天文一六（一五四七）年時点では毛利氏は伯耆に進出しておらず、疑わしい。そもそも幸綱は「五郎殿」なる人物の意向を受けて文書発給を行っている。明らかに五郎は幸綱の上に位置する人物といえる。日野山名氏当主は義幸以来、五郎を仮名として名乗っており、文書発給者・幸綱の「幸」は日野山名氏からの偏諱が想定できる。つまり、五郎とは日野山名氏を指すと見てよい。天文一六年段階の日野山名氏は日野郡内で所領安堵を行っているのである。

天文六（一一年）にかけて見られる山名摂津守と異なり、【史料5】の五郎は官途を名乗っていない。五郎は若年と考えられる。天文一一年から同一六年の間に日野山名氏は代替わりしたのではないか。五郎は【史料5】で「前々」の如く安堵の意向を示しており、代替わりに伴う継目安堵のように思われる。五郎の当主就任は天文一六年とさほど遠くない時期であろう。足利義藤が登場する時期と合致していることから【史料5】の五郎は、永祿年間に登場する藤幸に該当する可能性が高い。

以上を踏まえると、少なくとも天文前期の日野山名氏は京都社会とのつながりが散見できる一方、天文後期以降は日野郡で活動していた形跡がある。天文一一（一六年）の間に日野山名氏は日野郡に復帰したと考えられよう。

もう少し踏み込むと、日野山名氏と京都社会の関係を示す史料が天文前期（同一〇年代）に集中している点は留意しておく必要がある。当該期の尼子氏は中国山地を越えて他国侵攻を繰り返しており、<sup>(39)</sup>境目地域に当たる日野郡は尼子氏の軍事行動の影響を受けた地域と考えられる。尼子氏の他国侵攻では伯耆国衆も動員されていた。<sup>(40)</sup>いったん尼子氏傘下に入った日野山名氏が反発し、天文前期までに国外退去を選択した可能性も考えられる。その後、尼子氏の他国侵攻は天文一〇年代を境に一旦落ち着く。長谷川博史氏によると、天文後期以降

の出雲尼子氏は無理な他国侵攻を慎み、分国経営を重視するというから、<sup>(41)</sup>在地情勢の安定化が想定できる。尼子氏の動向と日野山名氏の在地復帰の時期はちょうど合致している。このように、日野山名氏は情勢が落ち着く中で帰国し、尼子氏傘下に復帰したと理解しておきたい。つまり、日野山名氏は政治情勢に応じて在国と在京を使い分けていたようであり、退去・残留の二者択一的な理解はいずれも一面的といえる。

ところで戦国期の日野山名氏は在国志向を強める一方で、京都社会との回路を維持していた。一五世紀に形成された都市領主としての性格は完全に放棄されるわけではなく、情勢次第では再び在京を選択する余地があったといえる。<sup>(42)</sup>こうした側面は一六世紀の元在京領主の動向を考える上で注目できるだろう。

### （三）毛利・尼子戦争期の日野山名氏

永祿年間の中国地方では、毛利氏の勢力が拡大し、山陰地方の尼子氏を圧迫する情勢が展開した。永祿五（一五六二）年、毛利氏は石見国の尼子勢力を排除するが、同時に伯耆国にも本格的に進出していった。出雲の尼子勢力を挟撃するように戦線が展開する中、日野山名氏による軍事活動が伝えられている。

#### 【史料6】

出張之儀彼是為「相談」、昨日粟木工其許江差遣候処二、法泉寺爰元被<sub>レ</sub>越候間、猶以可<sub>レ</sub>然得<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>候、今日爰許被<sub>レ</sub>立候様にと存候、万得<sub>二</sub>其心<sub>一</sub>候、

又伯州之儀日野本城之事、山名摂津守殿久代出候而仕取候、雲州番衆中井

平三兵衛尉・米原平内罷退候、又從<sub>二</sub>作州衆<sub>一</sub>茂惣望之由候而爰許使者下

着候、東口如<sub>レ</sub>此成<sub>レ</sub>行候間可<sub>レ</sub>然候、委細從<sub>二</sub>法泉寺<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>申遣<sub>一</sub>候、謹言、

六月十八日<sup>(永祿五年)</sup> 隆元 御判

元就 御判

山縣木工助殿<sup>(春道)</sup>  
国司雅楽允殿<sup>(就信)</sup>



永禄五年六月に出された毛利元就・隆元父子の連署書状によれば、山名摂津守が備後国久代より出陣し、日野本城を攻略したと伝えている。萩藩士となった日野山名氏の子孫が伝える史料によれば、この山名摂津守の実名は「藤幸」という。<sup>(44)</sup>既に触れた【史料5】の五郎であろう。藤幸は毛利方に与して、尼子氏の番衆を撤退させたところある。日野本城とは、日野郡生山の亀井山城を指すとされる。<sup>(45)</sup>永禄五年夏までに毛利氏は伯耆全域を制圧していく。

その後、毛利氏が西伯耆で軍事活動を展開する際には、「久代・神辺・<sup>(46)</sup>（杉原重忠）・<sup>(47)</sup>（藤七）・<sup>(48)</sup>（藤七）」の三人衆が中核となっている。備後国衆の杉原・宮氏と並んで、毛利氏の西伯耆進出を支える要の一人に藤幸が位置付けられていた。このうち、久代宮氏は日野山名氏との間で婚姻関係を結んでいた形跡があり、<sup>(49)</sup>伯耆・備後国境を越えて広がる国衆同士の婚姻ネットワークを活用した連携が存在したと見られる。加えて元就は「日野之儀も境目ニて大事候」と述べており、<sup>(50)</sup>境目の重要地域と認識していた。また、元就は「摂州家来之衆」より人質を取る際には藤幸と相談の上で判断するよう指示しているが、その理由は「何とそ家来之堅候様にしとき事にて候」という。<sup>(51)</sup>毛利氏が人質を媒介に藤幸家臣団の結束を高める方策を模索している点は興味深い。境目地域を抑える日野山名氏の重要性を毛利氏は認識し、日野山名氏に対する厚遇と関与につながったのであろう。日野山名氏は前代からの権威を有し、同時に日野郡内の諸領主を束ねる存在であった。毛利氏の西伯耆進出は新しい秩序を創出するというより、こうした旧来の地域秩序を活用する上で成り立っていたともいえる。<sup>(52)</sup>

しかし、元就の人質策は、情勢次第で日野山名氏の家中が動揺する危険を内包していたことの裏返しでもある。日野山名氏は天文後期以降、尼子氏傘下に復帰していた。藤幸は尼子勢力の退潮を見越して、毛利氏に寝返ったと考えられるが、少なくとも永禄年間に入ってから動きであろう。そうした流動的な情勢は日野山名氏、日野郡の諸領主層にも影響を与えた。間もなく元就の懸念は的中することになる。

永禄七（一五六四）年八月、「日野衆逆心」・「日野郡敵心」と呼ばれる争乱が発生し、日野郡江尾の蜂塚城（江尾要害）で激しい戦闘が行われた。<sup>(53)</sup>先行研究では蜂塚城を拠点とする蜂塚右衛門尉と毛利方の合戦と理解されているが、実はこの時、毛利氏に対する藤幸の「逆意」も伝えられている。<sup>(54)</sup>実際、同年七月の毛利氏の軍事活動は「久代・神辺」の二人衆のみとなっており、元就ら毛利氏首脳部は杉原・宮両氏に日野郡溝口への進出を指示しているほか、伯耆国衆の南条宗勝や備中国衆の三村家親にも合力を要請するなど述べている。<sup>(55)</sup>事態の深刻さが垣間見えることから、七月時点で既に藤幸は何らかの離反行為に出ていた可能性がある。『森脇覚書』によれば、蜂塚氏の離反は永禄七年八月の合戦よりも先行するというが、永禄七年八月の合戦がわざわざ「日野衆逆心」・「日野郡敵心」と呼称される点はこれまでの争乱と様相が異なることを示唆しているのではない。永禄七年八月の合戦は新たに藤幸が加わることでより深刻化・大規模化した争乱といえよう。離反以前の藤幸は宮景盛の次男・景幸を養子に迎えていたと伝えられるが、最終的に毛利氏と通じる景幸が藤幸を討つたという。<sup>(56)</sup>これ以後、藤幸の消息を伝える史料は管見の限り確認できない。永禄七年の争乱で毛利氏を離反した藤幸は討死するに至ったと見てよい。

これより前の永禄五年末に毛利氏が尼子旧臣の本城常光（石見銀山山吹城主）を謀殺した事件を受けて、毛利方国衆に動揺が広がり、伯耆国内を含めた一部の国衆が再び尼子方に復帰している。<sup>(57)</sup>そうした尼子・毛利両勢力の間で揺れ動く情勢の下で藤幸もまた離反するに至ったといえる。元就の懸念通り、日野山名氏ら諸領主の不安定さが露呈した事件であった。それでは藤幸没後の日野山名氏はどのような動きを見せるのか。次で詳しく見ていきたい。

#### （四）尼子再興勢力と日野山名氏

藤幸討死後、日野山名氏の家督は養子の景幸が継承したという。<sup>(58)</sup>出雲尼子氏は永禄九（一五六六）年に滅亡し、伯耆国内の争乱も毛利氏の下で鎮静化する。

永禄一二（一五六九）年三月、毛利氏の北九州出陣に際して、日野衆も動員されている。<sup>(58)</sup> 景幸の下で落ち着いたように見えるが、同年六月、尼子氏再興を掲げる尼子勝久・山中幸盛らの軍勢が出雲・伯耆に侵入すると、情勢は一転する。

永禄一二（一五六九）年三月にかけて、興幸・千才童子なる人物らが日野郡内各所で毛利氏と合戦している。長谷川博史氏は、興幸・千才童子を日野山名一族と比定し、進氏や日野氏ら日野郡内の諸領主層を率いて、尼子再興勢力と連携して毛利氏に反抗したと指摘している。<sup>(59)</sup> 日野郡内は尼子再興勢力と連動した争乱状態に置かれたのである。

その上で筆者が注目したいのは次の史料に見える千才童子の存在である。

#### 【史料7】

今度於大入ハ、久代衆相動候、然処謀反人討捕候、無<sup>(60)</sup>比類<sup>(61)</sup>高名候、就<sup>(62)</sup>其八谷分之内壹貫貳百田壹反遣候、千才童子幼少之儀候之間、為<sup>(63)</sup>我等<sup>(64)</sup>判形候、弥々忠儀肝要候者也、

永ノ十三

二月廿五日 興幸（花押）

進平次郎殿

#### 【史料8】

（花押）

今度籠城無<sup>(65)</sup>比類<sup>(66)</sup>候、就<sup>(67)</sup>其五百疋之処、榎村之内ニて可<sup>(68)</sup>被<sup>(69)</sup>遣候、千才

童子様就<sup>(70)</sup>御幼少<sup>(71)</sup>、從<sup>(72)</sup>各如<sup>(73)</sup>此候、恐々謹言、

永ノ十三

日野土佐守

三月十四日 秀清（花押）

進玄番允

幸経（花押）

進平次郎殿

【史料7・8】は興幸らが進氏に発給した感状類である。いずれも共通するのは千才童子が幼少という点である。興幸単独の発給文書は千才童子に敬称を付しておらず、日野・進両氏連署状には興幸が袖判を据えている。興幸は千才童子に近い日野山名一族であろう。親族の興幸に千才童子が補佐される体制を見る限り、千才童子は本来日野山名氏の家督を継ぐことが可能な立場であったように思われる。一方、日野山名氏の名跡は景幸が継承し、日野姓に改称した上で近世は萩藩士に転じていくから景幸の系統も健在であった。要するに、当該期の日野山名氏内部では毛利方の景幸系と尼子方の千才童子・興幸系の二系統に分裂していたといえる。さらに【史料7】では「謀反人」を討ち取ったとある。

日野山名氏・日野衆内部が毛利・尼子両陣営に分裂し、深刻な対立が存在した様子を看取できる。千才童子の素性は定かではないが、【史料7・8】で垣間見える立場を踏まえると、景幸とは異なる系統、すなわち藤幸遺児の可能性が高い。藤幸討死後、日野山名氏内部では藤幸遺児を取り立てる動きが熾っていたと見てよい。そのような動きが尼子再興勢力の蜂起と呼応する形で表出し、千才童子・興幸陣営は日野郡の領主層を巻き込みながら毛利氏と対決することになったのである。

しかし、尼子再興勢力の出雲・伯耆侵攻は元亀二年八月までにいったん毛利氏によって鎮圧された。日野郡内の佐河城なども落城しており、千才童子・興幸らは尼子再興勢力に従って退去したと考えられる。その後、尼子再興勢力に与した日野衆は山中幸盛や美作国衆牧氏らと連携し続けており、最終的に天正六（一五七八）年の播磨上月城籠城戦まで行動を共にしている。尼子再興勢力は毛利氏と対立する織田信長の支援を受けて上月城に入るが、毛利方の大軍に包囲されて天正六年七月に開城を余儀なくされた。こうした中、毛利氏に城を明け渡す際、下城した人々の中に「日野ノ屋形五郎」・「日野屋形」・「日野五郎」なる人物が見える。「屋形」とある上、日野山名氏当主の仮名「五郎」を名乗ることから日野山名氏と見てよい。『陰徳太平記』によると、五郎は「其

ノ比十六七歳」という。五郎は元服間もない年齢と思われることから、先述した千才童子が成長した姿ではなからうか。さらに七月六日、進氏に対して「幸」と名乗る人物が上月籠城を労う感状を発給している。<sup>⑥7</sup>『萩藩閥閥録』は山中幸盛に比定するが、花押の形状が明らかに異なる。宛所の進氏は日野衆であり、これまでも日野山名氏から文書を発給されていた。周辺状況を踏まえると、「日野ノ屋形五郎」・「日野屋形」・「日野五郎」と同一人物であろう。こうして尼子再興勢力と連携した対毛利氏抵抗戦は終結することになったのである。

その後の五郎の行方は定かではないものの、日野山名氏と思しき人物の活動は散見される。天正八（一五八〇）～同九（一五八一）年頃には「政幸」なる人物が伯耆羽衣石城周辺の合戦につき感状を発給している。<sup>⑥8</sup>日野衆の進氏に対する発給文書であり、「幸」の字を持つことから日野山名一族と思われるが、天正六年の五郎の花押とやや異なる形状である。同一人物と見てよいか慎重に考える必要があるが、尼子旧臣で石見国人出身と考えられる福屋彦太郎が羽柴秀吉の支援を受けつつ、羽衣石城周辺で対毛利氏戦に従軍した事例が確認できる。<sup>⑥9</sup>このような周辺状況を踏まえると、政幸も同様の存在であったのだろう。

さらに尼子旧臣たちは、織豊期に同輩の亀井茲矩が因幡鹿野城主となり、因幡国西部に所領を獲得するとその家臣団に組み込まれていた。参考までに因幡国鹿野の幸盛寺には「日野五郎之房」なる人物の墓が残されているが、この人物は文禄年間に亀井氏によって討たれたという。<sup>⑦0</sup>「之」の字は異なるものの、音が「幸」と同一であり、五郎を名乗る日野山名氏系統であったのではないか。尼子旧臣の中には近世大名化した亀井氏の家臣になった者も多いが、日野五郎の場合はそうならなかったと見える。<sup>⑦1</sup>いずれにしても、藤幸直系と思われる千才童子・五郎の系統は史料上から消えていき、毛利系の景幸の子孫が萩藩士として存続していったのである。

以上、戦国期日野山名氏の動きをまとめておく。文明三年の下向後、在国志向を強めるが、天文前期には在京活動を復活させた形跡があるように、完全に

京都社会との回路が途絶したわけではなかった。戦国期の地方武家領主層は在国志向を強める一方で、京都という選択肢も残されていた点は注目できる。転じて天文後期以降は、再度在国するようになったが、隣国の国衆との婚姻ネットワークを広げたほか、尼子氏や毛利氏といった大名権力の狭間に位置する境目地域の領主として、流動的な情勢に翻弄される複雑な動向を示した。とりわけ戦国期には日野郡内の諸領主層を束ねる「屋形」として活動しており、山名一門に連なる権威、日野山名氏を軸とした地域秩序の根強さを看取できる。その特殊な性格に関しては、大名権力側も地域支配・軍事活動面で活用する思惑があったように、日野山名氏の存立基盤の一つになっていたといえよう。新たに進出してきた毛利氏はこのような地域社会の枠組みを活用する方針であったが、永禄年間以後の情勢はその存続を許さなかった。大名権力同士の争い、境目地域の流動性が今まで以上に激しくなっており、中国地方における戦争の質的变化を表すように見える。結果的に日野山名氏の離反と分裂という事態を招くのであった。

## おわりに

本稿では、日野山名氏を素材として山名庶流家の展開事例を考察した。各章末尾にまとめたのでここでは繰り返さないが、最後に本稿で十分触れられなかった点を述べて稿を閉じたい。本稿で触れたように、一五世紀の日野山名氏は惣領家と密接に結合し、その「同族連合体制」の下に包摂されたが、一六世紀以降も注目すべき史料が存在する。永禄三（一五六〇）年七月、惣領山名致豊の二十五年忌法要が但馬国生野の銀山寺で執り行われた際、但馬明禪寺の僧侶が関与しているが、「是ハ伯州日野屋形御舎弟」であったという。<sup>⑦2</sup>時期的に藤幸の弟である可能性が高い。明禪寺は山名時熙母の菩提寺と伝えられる禪宗寺院であり、天文一四（一五四五）年には惣領山名祐豊が幕府に派遣した使者を明禪寺僧が担っていた。<sup>⑦3</sup>惣領家と密接な寺院に日野山名一族が入院していた



事例は、依然として惣領家とつながりを有していたことの証左であろう。その一方で伯耆守護家との関係は判然としない。一五世紀後半に伯耆国内で反守護争乱が広がった際、日野山名一族が知行した法勝寺も反守護方の拠点と化していた。<sup>(76)</sup>この事例だけで伯耆守護家と常に対立関係にあったとは必ずしも言えないが、伯耆守護家よりも惣領家と近い関係にあったことは確かであろう。日野山名氏は、伯耆守護家が事実上天文年間に滅亡した後も存続しており、同守護家と一定の距離を保つ自立的な存在であったように見て取れる。守護職を持たない山名庶流家の存在形態を考える際に参考となろう。ただし、一六世紀における「同族連合体制」の内実は他の事例を含めて広く検討すべきと思われるため、継続して取り組みたい。

もう一つ触れておきたいのは、日野山名氏の場合、一時期を除くと一六世紀段階では出雲尼子氏との密接な関係が浮かび上がる点である。このような傾向は同じ山名一門で伯耆国会見郡尾高を拠点とする幸松氏も同様であり、むしろ尼子勢力と連携して伯耆国内に引き込み動きすら見える。<sup>(77)</sup>西伯耆地域の場合、出雲に隣接するという地理的環境も影響し、早くから尼子勢力の進出が見られた。これまで出雲尼子氏と山名氏が対立し、山名勢力が駆逐される構図で語られることがあったが、実際はそう単純ではない。山名一門・国衆ら諸領主層が出雲尼子氏とどのように向き合い、出雲尼子氏の伯耆進出とその支配が実現したのか。この点は毛利氏も同様である。今後は伯耆の諸領主層の視点を踏まえつつ、大名権力の進出を自明視しない二項対立的な構図を排した考察が必要であらう。

なお、本稿では限られた史料をもとに行論したため、推測に頼った箇所が多い上、主に政治動向の考察が中心となった。日野山名氏の被官組織や所領・権益といった側面は明らかにし得なかった。日野山名氏の拠点とされる亀井山城が所在する生山は日野川に面しており、生山から法勝寺に直結する陸上交通路なども存在する。日野山名氏が水陸交通の要衝を押さえた領主であった様子が

うかがえるが、史料の限界もある。いずれの点も今後の課題としておきたい。

- (1) 川岡勉『山名宗全』(吉川弘文館、二〇〇九年、一五九―一七〇頁)、市川裕士「南北朝動乱と山名氏」(『室町幕府の地方支配と地域権力』戎光祥出版、二〇一七年、初出二〇一三年)・同「室町期における山名氏の同族連合体制」(『前出市川著書所収』、岡村吉彦「山名氏の同族連合体制と庶流守護家」(川岡勉編『中世後期の守護と文書システム』思文閣出版、二〇二二年)。なお、本稿では引用する論文・書籍の副題を原則として省略している。
- (2) 本来であれば、義幸流山名氏などと呼称すべきかと思われるが、混乱を避けるため、ひとまず本稿では先学で用いられる「日野山名氏」の表現に統一する。
- (3) 山田徹「室町領主社会の形成と武家勢力」(『ヒストリア』二三三号、二〇一〇年)、川口成人「大名被官と室町社会」(『ヒストリア』二七二号、二〇一八年)、同「室町期的大名被官と都鄙の文化的活動」(芳澤元編『室町文化の座標軸』勉誠出版、二〇二一年)など。
- (4) 「池田本」とは、江戸幕府の交代寄合となった山名氏(因幡守護山名豊国の家系)の下で家老をつとめた池田氏に伝わった系図。同系図については、宮田靖国編『山名家譜』(六甲出版、一九八七年)写真版参照。このほか同系統の系図としては、「大明寺本」・「宗鏡寺本」・「因幡民談記本」があり、主に但馬・因幡両国内に伝来している。わずかに文字異同はあるが、ほぼ同じ表記である。
- (5) 国立公文書館蔵『寛永諸家系図伝』第八冊所収「山名系図」(請求番号一五六・〇〇一五)。この系図群は『寛永諸家系図伝』の最終稿以前の状態(未定稿)を含んでいる(平野仁也「寛永諸家系図伝」編纂の実態と未定稿系図」『江戸幕府の歴史編纂事業と創業史』清文堂出版、二〇二〇年、初出二〇一三・一八年)。寛永年間の幕府修史事業に伴い収集された系図の一種と思われる。
- (6) 「伯州山名代々次第」(『鳥取県史 第二巻 中世』鳥取県、一九七三年、八二〇頁)。
- (7) 惟高妙安と山名氏の関係は、日置桑左エ門「伯耆国大谷保国寺私考」(『日本歴史』三四八号、一九七七年)など参照。
- (8) 桜井英治『日本の歴史二二 室町人の精神』(講談社、二〇〇九年、初出二〇〇一年、三九頁)。以下、本稿で引用する桜井氏の見解は本書に拠る。
- (9) 「門葉記」永和三年二月一六日条。なお、義幸の生年に関しては、本郷恵子・西田友広「大日本史料 第六編之四十九」(『東京大学史料編纂所報』五一号、二〇一六年)にて既に言及がある。

- (10) 例えば、永和二年七月～十一月、石清水八幡宮領丹後国佐野別宮地頭職に関する遵行命令が「山名民部少輔」宛に出されているが、これを受けて義幸が守護代土屋氏に指示を発している（『松雲公採集遺編類纂』「石清水八幡宮旧記抄 下」所収文書、『大日本史料』第六編四七冊、五〇～五一頁）。なお、義幸の官途は少なくとも康暦元年一月以降「讃岐守」となっている（同年同月一日「室町幕府御教書」大通寺文書）。
- (11) 師義夫妻の死没記事は『花宮三代記』永和二年三月一日条（師義・同年閏七月五日条（師義妻）など参照。また、『常楽記』永和三年五月条によれば、「山名五郎室」出雲守護佐々木高秀娘）が死没している。義幸の仮名は五郎であったと見られるため（拙稿「南北朝期佐々木氏の分国支配と山名氏」『古代文化研究』三三二号、二〇二四年）、この人物は義幸の妻に比定できる。
- (12) 羽下徳彦「室町幕府侍所頭人付山城守護補任沿革考証稿」（『東洋大学紀要文学部篇』一六号、一九六二年）、佐藤進一「室町幕府守護制度の研究下 南北朝期諸国守護沿革考証編」（東京大学出版会、一九八八年）。
- (13) 『明德記』上巻。翻刻は和田英道『明德記 校本と基礎的研究』（笠間書院、一九九〇年、一八頁）参照。
- (14) 日野郡居住説は近世の編纂物に見える（『伯耆民談記』巻之第一四「久米郡古城之部」）。なお、前掲注（13）『明德記』の記述は義幸の病氣に伴い、満幸が義幸に代わって在京したように読み取れる。義幸が在国した可能性はあろう。
- (15) 田中義成『南北朝時代史』（明治書院、一九二二年、二七二頁）など。
- (16) 山家浩樹「室町時代の政治秩序」（『日本史講座 第四巻 中世社会の構造』東京大学出版会、二〇〇四年）、山田徹「室町時代の支配体制と列島諸地域」（『日本史研究』六三二号、二〇一五年）など。また、都鄙をまたぐ武家領主の諸活動などに関しては、前掲注（3）の諸研究も参照。
- (17) 前掲注（3）山田論文。
- (18) 木下聡「室町幕府外様衆の基礎的研究」（『室町幕府の外様衆と奉公衆』同成社、二〇一八年、初出二〇一一年）。そのほか山名一族の外様衆に関しても本論文の整理が参考になる。以下、本稿で触れる木下氏の見解は本論文に基づく。
- (19) 『碧山日録』長禄三年四月五日条。なお、□は欠字箇所を指す。とは見せ消ちを示している。
- (20) 山本氏の見解については、同『山名宗全』（ミネルヴァ書房、二〇一五年、二六〇頁）。以下、本稿で触れる山本氏の見解は本書に基づく。
- (21) 清水克行「ある室町幕府直臣の都市生活」（『室町社会の騷擾と秩序 増補版』講談社、

- 二〇二二年、初出二〇〇二年）。
- (22) 『文正記』（『群書類従』第二〇輯・合戦部、三五〇頁）。
- (23) 持豊父である時熙は永享七（一四三五）年没。持豊母（山名氏清娘）は康正二（一四五六）年に十七年忌法要が行われた（『東京大学史料編纂所影写本「蟬庵稿」』、請求番号三〇一六七一七二）。逆算すれば、持豊母は永享一二（一四四〇）年に没していたことが分かる。
- (24) 小谷利明「畠山義就と女房衆」（『八尾市立歴史民俗資料館研究紀要』三一号、二〇二〇年）。なお、金沢源意が山名庶流であることについては、拙稿「備後金沢氏の素性について」（『戦国史研究』八三号、二〇二二年）参照。
- (25) 年代は下るが、例えば、『陰徳太平記』では日野山名氏を「日野ノ屋形」と表記している（『陰徳太平記』巻五六「上月落城付勝久自害之事」）。また、『史料5・8』のように、日野郡の領主の中には「幸」の字を付ける者が散見される。このほか、日野郡日南町・石見神社に残る天正十一年棟札にも「大旦那源幸繩」の名前が見える（『新鳥取県史 資料編 古代中世Ⅱ 古記録編』一二八頁）。当時三〇歳と記される「幸繩」は天文二三（一五五四）年生まれであり、日野山名氏からの偏諱が想定される。「幸」の偏諱が郡内の諸領主層で広く確認できる点は「屋形」の地位を示唆するものだろう。なお、「屋形」呼称については、今岡典和「「屋形」考」（『十六世紀史論叢』一九号、二〇二三年）参照。
- (26) 『応仁別記』（内閣文庫本）。翻刻は和田英道編『応仁記 付応仁別記』（古典文庫、一九七八年、一三七頁）参照。
- (27) なお、木下氏は西国寺再興寄附帳に見える「摂津守正旦」を持幸父の法名ではないかと推測している。ただし、当該史料には名字が記されておらず、山名被官やそれ以外の人物も掲載されていることから、官途のみで山名氏と判断できるわけではない。よって本稿では正旦を日野山名一族に見ることは控える。
- (28) 『応仁別記』（内閣文庫本）。前掲注（26）和田英道編著一八八頁参照。
- (29) 片岡秀樹「伯耆山名氏の活動」（『地方史研究』二九巻二号、一九七九年）、高橋正弘『因伯の戦国城郭 通史編』（自費出版、一九八六年、四〇一五頁）、鳥取県立公文書館県史編さん室編『尼子氏と戦国時代の鳥取』（鳥取県、二〇一〇年、五〇一二頁）など。
- (30) 拙稿「応仁・文明の乱と山名氏」（『日本史研究』六六〇号、二〇一七年）。
- (31) 『文明三年』二月一六日「金子衡氏書状」（『新鳥取県史 資料編 古代中世Ⅰ 古文書編上』四九六号、東寺百合文書さ函一三九）。以下、本稿で『新鳥取県史』を出典とする場合は、新鳥取県史と略記して文書番号を記す。

- (32) 前掲注(29)『尼子氏と戦国時代の鳥取』二四～二七頁。
- (33) 高橋正弘氏は、尼子氏の下で残留したとする説(前掲注「29」高橋著書三九頁)、岡村吉彦氏は尼子経久の伯耆進出に伴い国外退去したとする説(前掲注「29」『尼子氏と戦国時代の鳥取』二七頁)をそれぞれ主張している。
- (34) 天文六年三月二八日「室町幕府奉行人連署奉書」(『室町幕府文書集成 奉行人奉書篇』三三七五号、革嶋文書)。東京大学史料編纂所影写本をもとに字句を修正した。なお、□は欠字箇所を指す。
- (35) 『大館常興日記』天文十一年四月一三日条。
- (36) 前掲注(29)高橋著書八三～八六頁。
- (37) 三上経実の因幡在国は『大館常興日記』天文七年九月八日条に見える。また、三上氏の在京活動等については、木下昌規「御隨身三上記」の基礎的研究」(『十六世紀史論叢』四号、二〇一五年)参照。
- (38) 天文十一年八月□日「幸綱安堵状」(『新鳥取県史』長谷部文書一号)。なお、□は欠字箇所を指す。
- (39) 長谷川博史「尼子氏による他国への侵攻」(『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館、二〇〇〇年)。
- (40) 例えば、一六世紀前半に山陰地方に滞在していた禅僧惟高妙安の抄物『玉塵抄』によれば、尼子氏の美作・播磨侵攻に従軍した「伯州衆」の情報が散見される。本史料については、倉恒康一「抄物資料に見える戦国期山陰地域関係記事について」(『鳥取地域史研究』一五号、二〇一三年)参照。
- (41) 前掲注(39)長谷川著書「尼子氏による他国への侵攻」。
- (42) 京都への転出事例は石見守護山名氏でも確認できる(拙稿「応仁・文明の乱後における石見山名氏の動向」『地方史研究』六八巻五号、二〇一八年)。
- (43) (永禄五年)六月一八日「毛利元就・同隆元連署書状写」(『新鳥取県史』六七七号、『萩藩閥閥録』巻五五「国司与一右衛門」)。
- (44) 『萩藩閥閥録』巻二九「日野要人」。
- (45) 前掲注(39)長谷川著書「尼子氏の美作国支配と国内領主層の動向」(初出一九九五年)、前掲注(29)『尼子氏と戦国時代の鳥取』五六～五七頁など。
- (46) (永禄六年カ)七月二三日「毛利元就書状写」(『新鳥取県史』七〇八号、『萩藩閥閥録』巻三三「粟屋勘兵衛」など)。
- (47) 「寄組日野家」(『近世防長諸家系図綜覧』防長新聞社、一九六六年)。備後久代の宮興盛妻・景盛母は「山名某女」という。久代は日野郡に近く、藤幸は久代に身を寄せて

- いたとする【史料6】を踏まえると、この女性は日野山名氏出身の可能性が高い。
- (48) 前掲注(46)「毛利元就書状写」。
- (49) (永禄五年カ)十一月二日「毛利元就書状写」(『新鳥取県史』六八五号、『萩藩閥閥録』巻三三「粟屋勘兵衛」)。
- (50) 旧来秩序の活用という点是因幡国の事例で指摘がある(長谷川博史「毛利氏の山陰地域支配と因幡の諸階層」『戦国期大名毛利氏の地域支配に関する研究』二〇〇〇、二〇〇二年度科学研究費補助金基盤研究(C)(二)研究成果報告集、二〇〇三年)。
- (51) (永禄七年)八月二五日「毛利元就書状」(『新鳥取県史』七六四号、日野文書、(同年)同月同日「毛利元就書状」(『新鳥取県史』七六五号、山田家文書)など)。
- (52) 前掲注(44)『萩藩閥閥録』巻二九「日野要人」。
- (53) (永禄七年)七月二四日「毛利元就・吉川元春・小早川隆景連署書状」(『新鳥取県史』七五一号、山田家文書)。
- (54) 『森脇覚書』(米原正義校注『中国史料集』人物往来社、一九六六年、二〇四頁)。
- (55) 前掲注(44)『萩藩閥閥録』巻二九「日野要人」。
- (56) 前掲注(54)『森脇覚書』二〇四頁。
- (57) 前掲注(44)『萩藩閥閥録』巻二九「日野要人」。
- (58) (永禄十二年)三月一四日「吉川元春・小早川隆景連署書状写」(『新鳥取県史』八三三三、『萩藩閥閥録』巻三八「井上彦左衛門」)。
- (59) 前掲注(39)長谷川著書「尼子氏の美作国支配と国内領主層の動向」。
- (60) (永禄十三年二月二五日「山名」興幸感状」(『新鳥取県史』八五八号、古畑務氏所蔵文書)。
- (61) (永禄十三年三月一四日「山名」興幸袖判日野秀清・進幸経連署書状」(『新鳥取県史』八六〇号、古畑務氏所蔵文書)。
- (62) (元亀二年)八月二〇日「毛利元就書状写」(『新鳥取県史』九一四号、『萩藩閥閥録』巻二五「湯原文左衛門」)。
- (63) (天正元年)八月二二日「立原久綱書状」(『新鳥取県史』九六六号、米井家文書)。
- (64) 前掲注(25)『陰徳太平記』。
- (65) 寛永二十一年十一月一日「山県長茂覚書」(『大日本古文書 家わけ九 別集 吉川家文書』「石見吉川家文書」一五一号)。
- (66) (天正六年)七月五日「吉川元春・小早川隆景外二名連署起請文写」(『新鳥取県史』一一三五号、右田毛利譜録)。日野五郎は尼子再興軍の中核である山中幸盛・立原久綱と並んで宛所に記されており、中心的存在であったことがうかがえる。なお、長谷川博史氏は日野五郎を日野氏に比定しているが(前掲注「39」長谷川著書「尼子氏の美作国



支配と国内領主層の動向」、【史料8】に見えるように、日野氏は日野山名氏配下として活動していたことから、「屋形」を号する「日野五郎」と同一視することはできない。本文で述べたように、日野山名氏と見るべきであろう。

(67) 天正六年七月六日「某感状」(『新鳥取県史』一三六号、古畑務氏所蔵文書)。このほか、『萩藩閥閥録』巻一三〇「進三郎兵衛」にも同日付で「幸」が署判した感状が二通収められている。

(68) (年未詳)七月二十四日「政幸感状」(『新鳥取県史』一四〇六号、古畑務氏所蔵文書)。なお、花押画像は『新鳥取県史 資料編 古代中世Ⅰ 古文書編 別冊』所収「花押・印章集」にて確認した。

(69) 倉恒康一「徳島福屋氏旧蔵の尼子氏関連文書について」(『古代文化研究』二六号、二〇一八年)。なお、倉恒氏は尼子方の石見国人福屋隆兼と福屋彦太郎を同一視する言説を疑問視し、彦太郎の素性は定かではないとする。ただし、尼子旧臣河本氏が著した『雲陽軍実記』には播磨上月城に籠った尼子旧臣の中に「福屋彦太郎」の名が見えるほか(『同』巻之五「木下藤吉郎秀吉播州上月城加勢并尼子勝久氏久生害之事」、津和野藩主亀井氏の由緒書には天正期の因幡鹿野城番衆の一人として「石見国ノ福屋彦太郎」と記されている(年月日未詳「亀井家由来」、『高野山文書 家わけ 第六「旧学侶方」派文書』一二二号、理性院文書)。もちろん彦太郎が福屋隆兼と同一人物であるとは言いつれず、その点は倉恒氏の見解を支持したいが、二次史料とはいえ、尼子系史料に登場する以上、福屋彦太郎が尼子旧臣の石見国人出身であった可能性は認めてよいのではないかと思われる。なお、前出の「亀井家由来」は最後の記事が寛永一二(一六三六)年十二月であるため、それ以降の成立と考えられる。

(70) 『因幡誌』第九「気多郡」。

(71) 例えば、『津和野町史』が紹介する慶長一七(一六一二)年の亀井家分限帳には尼子旧臣と思しき家臣(多胡・塩冶・牧・湯・牛尾など)が多数確認できるが、日野姓の人物は検出できない(沖本常吉編『津和野町史 第二巻』津和野町史刊行会、一九七六年、二七二～二七四頁)。

(72) 「大智院宗派之口面書」(『新鳥取県史 資料編 古代中世Ⅱ 古記録編』五八八～五八九頁、円通寺所蔵)。

(73) 小坂博之「山名常熙と禪刹」(『楞嚴寺、一九七六年、三～五頁)。

(74) 『大館常興日記』天文一四年六月六日条。

(75) (文明二二年カ)九月二日「山名政之注進状」(『新鳥取県史』五一七号、蜷川家文書)、文明二二年一〇月一日「山名政豊感状」(『新鳥取県史』五一八号、田総家文書)。

(76) なお、幸松氏の動向については別稿を期したい。

